

論文の和文要旨

論文題目

生涯としての〈詩〉

—— シュテファン・バチウの〈郷愁〉と詩の親密圏 ——

氏名

阪本 佳郎

(要旨)

本論文は、シュテファン・バチウというおそらくどの国、どの地域の文学、あるいは亡命文学や越境文学などの境界を跨ぐようななどの既存の文学ジャンルにおいても、人口に膾炙されているとは言い難いひとりの亡命の詩人の、生涯とその詩学を描き出す試みである。

バチウは、1918年、ルーマニアはトランシルヴァニア地方の文化首都たるブラショフに生まれた。戦間期より早熟の詩人として将来を囑望されつつも、戦後共産党政権の言論封殺の対象となり祖国を亡命、スイスではベルン、その後大西洋を渡ってブラジルへと移り住んだ。ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語を操り詩人として名を成す傍らラテンアメリカ諸国を政治記者として幾度も旅した。しかし1960年代半ばのウンベルト・ブランコ将軍によるクーデタと前後してリオ・デ・ジャネイロを離れ、アメリカ合衆国はシアトルに移り、そこから再び海を渡りハワイへ、そこで四半世紀を過ごした。故国ルーマニアの共産党政権が瓦解して後も、病身であったためについに帰還は叶わず、太平洋の臍たる群島にて客死、生涯をつうじて6カ国語で100冊以上にわたって書かれた優れた詩、評論、伝記、自伝、詞花集を世に出すなど、類をみない文学的業績を残している。また政治的にもルーマニアのみならず中南米諸国の軍政や独裁政権などの抑圧的機構に対して、言論において自由を求め果敢に闘った来歴をもち、書かれた新聞記事は5000とも7000ともいう正確な数字が分からないほど膨大な数にのぼる。にもかかわらず、この人物は今日祖国ルーマニアを含めて世界どこにおいても十分に顧みられているとは言い難い、忘却の淵にある詩人である。

シュテファン・バチウという詩人が今日ほとんど知られていないのは、ルーマニ

ア、シアトル、ブラジル、ハワイという西洋近代世界からすれば周縁とされる地・海域を旅したことによる。彼の遍歴の軌跡は、いわゆる文学の中心地を通らなかった。どこかの土地に場所を定めたとしても、政変とともにふたたび移動を余儀なくされ、時にはその文学的業績は権力によって抹消すらされ、忘却されてしまうこととなった。あるいは、その無名性はまた、バチウの文学の本性によるものとも考えられる。バチウの詩の営為は、公の領域に向けて放たれるよりも、つねに自らの身のまわりの、私的なつながりに、真摯に応えようとする姿勢に貫かれていた。彷徨の途上で出会う土地、人々、出来事との、個人的かつ親密なつながりが、つねに彼に言葉を書かせた。バチウは詩を、自らの親密な対象へと捧げられる手紙であると考えていた。彼の著作、とりわけ詩集は、発行される部数も数百部単位の極小のものばかりで、自らの手製の印刷でなされるものも多かった。それは親密さの圏域において流通する極小の経済であった。そうした小さな文学でも、彼の詩の生涯とその詩のネットワークをここにとりあげるのは、それが、発行部数や市場的規模では計れない価値、あるいはそうした今日当たり前になってしまった「大きさ」の経済学の孕む権力への、本源的批判となる価値を宿していると考えからである。またそれは20世紀文学という、二度の大戦、冷戦、民族紛争、資本主義と共産主義などのイデオロギーの如何にかかわらず、肥大化し暴走する世界システムにより追い立てられた、脱領域の時代にある人々に代表される文学の、破局を伴った大きな歴史のうねりに抗う詩の運動の一部として、重要な一面を占めうると考えるからである。本論文は、バチウの遍歴の生涯をつうじてひろがったこの連帯の圏域を、「詩の親密圏」と呼んで明らかにしていく。

以上の意義・目的のもとに為される本論文の試みは、以下のような構成をとる。

第1部「追想的評伝 シュテファン・バチウの詩の生涯とその〈郷愁〉」では、故国喪失の苦難の旅路にあって、常に詩に支えられたバチウの知られざる生涯を、その〈郷愁〉の詩学を反映させつつ、評伝的に描き出す。

第2部「*MELE-International Poetry Letter*とシュテファン・バチウの『詩の親密圏』」においては、バチウの詩の営みの核たる「詩の親密圏」のネットワークにおいて交わされた「反抗の詩学」を、詩人がハワイにて主催した詩誌 *MELE-International Poetry Letter* に参与した詩人・作家たちの作品を取り上げながら再現する。

結論「生涯としての〈詩〉、『千を越える四行詩』」においては、バチウの詩学全体に通奏低音のように響く、彷徨の生涯において出会われた人々・土地・出来事への〈

郷愁>と<沈黙>について明らかにする。

以下、簡単に各部の要点を述べたい。

第1部では、ブラショフから、ブカレスト、ベルン、リオ・デ・ジャネイロ、シアトル、ハワイと、移り住んだ土地ごとに章を7つに分け、それぞれの土地でのバチウの生を評伝的に描き出す。そこには大きく二つの目的がある。一つは、バチウの遍歴の生涯における<郷愁>の連続と変遷のあり様を明らかにすること。もう一つは、移り住んだ土地々々で出遇い、詩をともにした朋友たちとの関係性である。どちらも、バチウが好んで用いる二つの至言、“praf și purbere”「全ては埃燼に帰す」(ルーマニアの諺言)と“Aqui yace la espuma”「潮の泡はここにたたずみ」(ホルヘ・カレーラ・アンドラーデ)という言葉に象徴される。

バチウは、土地々々を移り人々と出会い別れる終わりなき旅路のなかで、結ばれては失われてゆく関係性を、この諸行無常の精神を表す諺言において言い表そうとした。バチウの詩は、つねに「想起する」ことを根本としている。その生涯を貫く詩学を描き出すには、その詩的な「想起」の運動そのものをとりあげる必要があり、事実を時系列的に列挙するだけでは不十分である。訪ねられた土地々々に織り込まれた詩人の記憶が、襲のように内外に広がってつながり合い、ある<郷愁の国>とも呼べる一つの次元が立ち上がってくるような、詩的精神地図を丹念に照らし出さねばならない。ここでは、バチウのメモワールや他の自伝的記述を縦糸に、流謫に伴う喪失と孤独から生まれた詩群を緯糸にして、その詩の生涯を織り上げ描き出すことで、シュテファン・バチウの<郷愁>の模様を浮かび上がらせる。

またその地柄となるのは、20世紀という歴史である。ここで「全ては埃燼に帰す」・「潮の泡はここにたたずみ」は更なる比喩をもつことになる。歴史の災厄に離散を余儀なくされた人々の、「舞い散る埃」や「潮の泡」のような儂き生を、バチウはその「自伝」にて取り上げ、そのエクリチュールにおいてで生かそうとした。バチウの自伝は、自らについて殊更に書くものではなく、亡命各地で出遇い親交を深めた、歴史に蹂躪された詩の朋友たちの群像劇のようなものであった。そのテキストは、亡命において出会われた土地土地や、歴史の災厄から放逐された人々と、詩によって結ばれた関係性の網である。

シュテファン・バチウの生涯を描き出すことで、その流謫に伴う<郷愁>と、詩による叛行を伴にした朋友たちとの織りなした「詩の親密圏」を、この第1部において

浮かび上がらせる。

第2部においては、バチウの詩の生涯において最も重要な試みの一つ、詩誌 *MELE-International Poetry Letter* に焦点をあてる。この *MELE*こそが、バチウの「詩の親密圏」の実践そのものに他ならないからだ。それは、バチウがハワイにたどり着いた直後1965年から1994年、詩人の死後まで続いた季刊の詩誌で、全90号には世界各地より400人以上の多彩な詩人や芸術家たちが参加した。その寄稿者の大多数がバチウが遍歴において出遇った詩の朋友たちであった。そこには、凡そ30もの言語で書かれた詩やエッセーなどの文学的テキスト、写真や挿画など多様な芸術作品が混在し、文学・藝術の一つの圏域を成していた。世界大に広がりをもつ私的かつ親密な関係性のうちに打ち立てられたその「詩の国際便」のネットワークは、詩人や作家たちが、それぞれの歴史において生き抜こうとする物語が、偶然に集い、互いに激励の波を送りあっている海であった。第2部では *MELE*の詩の共同体に参加した詩人・芸術家たちの作品を、テーマ毎にオムニバス形式で取り上げ、その関係の詩学のあり方を明らかにする。

第1章「詩誌 *MELE-International Poetry Letter* と『詩の親密圏』」は第2部の導入となる。上に述べたように、バチウの『詩の親密圏』が *MELE-International Poetry Letter* においてどのように具現化されているのかを輪郭的に描き出す。

第2章「オウイディウスの末裔たち」では、ルーマニアの亡命詩人たちに共有された、難破者の始原的範型としての「オウイディウス」を介した集合的歴史意識について、ヴィンティラ・ホリアとアンドレイ・コドレスクを取り上げながら論じる。

第3章「ウルムズの『寓話』のもとで」では、ルーマニア・アヴァンギャルドの祖とされるウルムズを中心としたルーマニアの前衛詩人たちの「反抗の詩学」について、ウルムズ、ミラ・シミアン、ヴィクトル・ヴァレリウ・マルジネスクを取り上げ論じる。

第4章「交感の時、亡命の詩人・芸術家とハワイ先住民の詩」では、亡命の終着地ハワイにおけるネイティヴ・ハワイアン知識人と移民の芸術家との詩的交感を *MELE* が証していたことについて論じる。とりわけ、ネイティヴ・ハワイアン知識人とのもとの共同のもと為されたジャン・シャルロのハワイ語の劇作とその壁画、またその息子ジョン・シャルロによるハワイ語のテキストを具体的な素材として取り上げる。

第5章「新たに言語を発芽させるための詩」では、1970年代前半から始まるハワイの

文化復興運動に言語教育者として大きく貢献した「ハワイ語の祖父」ともよばれるラリー・カウアノエ・キムラから *MELE* へ寄せられたハワイ語詩を扱い、その失われつつある言語を蘇らせようという、植民地主義への根源的抵抗の試みについて論じる。第6章「リオ・デ・ジャネイロへのアロハ、路上の石に秘めたサウダージ」では、ブラジル時代の盟友カルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラーヂの詩「道の真ん中に」の特集号から、シュテファン・バチウト、パッサ・マイ・ラーションというベトナムからきた女学生の、ドゥルモン・ジ・アンドラーヂの詩をめぐる交感の物語について論じる。

第7章「群島を行き交う希求の手紙」は、第2部まとめとして、*MELE*の「詩の親密圏」が、いわゆるグローバルな文学市場をもとにある一つの世界性を想定するような世界文学の公共圏とは、まったく異なる原理で成されていることを明らかにしつつ、その多なる世界の交響たる文学のもつ価値を打ち出し結論づける。20世紀という歴史に流涕を余儀無くされた詩人たちの反抗の詩学が、個々の詩と詩を結んでいくつものヴァリエーションをもちつつ *MELE* に散らばっている。その一つ一つの関係性をもつ潜勢力を示すことが、第2部での目的である。

結論では、詩をもって遍歴を生き抜いた詩人が最後にその道行きを振り返って書いた、生涯の総括とも言える詩集 *Peste o mie de catrene* 『千を越える四行詩』に焦点を当てる。長き旅の終わりが意識されるなか、生涯のあらゆる記憶が毎日のように脳裏に、魂に蘇ってくる。老いた詩人は思い出されるその若き日々を、ルーマニアの伝統的形式たる短詩、*catren* 「四行詩」を書くことによって再び生き直そうとした。また、死という自らの喪失に際し、その存在が、世界へと溶解していく過程にあって、詩はより物質的時間の永遠へと向かっていく。その郷愁と死の汀の領域に浮かび上がり、振り返られる〈詩としての生涯〉を明らかにする。

以上を通じて、ある固定的な文学空間や文学市場の公的な場において流通・認知されずとも、世界の片隅にしかと存在し、ささやかでもその片隅と片隅とを行き交う言葉のもつ力が証しされる。その意義を提示することが本論文全体の企図である。